

茅誠司先生を偲ぶ

青木秀夫（物理学教室）

最近刊行された辻邦生氏の「神々の愛でし海」を読んでいると「仕事とか研究とかは、いわば個人の生活のレベルでは消えてしまう僕たちの消費した時間を、文化や歴史を刻むために用いることじゃないか」という一節に行き当たった。今年科学界は一人の巨星を失った。茅誠司先生程、日本において科学者が社会にインパクトを与えた方は少ないのではないと思われる。また、茅先生程、人それぞれに様々な業績を通じて知られている科学者も珍しいのではないだろうか。物理学者としては、本多光太郎先生を受け継ぐ、日本の物理の伝統的な柱の一つとなってきた強磁性体の研

究により知られている。門下には現在学界でそれぞれ一家をなす重鎮の方々が輩出した。社会的には、学術体制刷新の中心として日本学術会議の創立メンバー（1954-58会長）となったことが最も大きい業績の一つであろう。また、本学にとっては、1943年の理学部教授就任以後、理学部長（1949-53）や物性研究所初代所長（1957-59）、そして、矢内原忠雄総長の後を承けた、60年安保を含む時代の総長（1957-63、当時の理学部長は山内恭彦先生）として尽力され、大きな足跡を残した。

60年安保などといっても最近の若い方々にはピ



1981年の茅コンファレンスでのスナップ（毎日新聞社提供。1981年8月27日夕刊）

ンとこないであろう（筆者自身も10歳だった）。私が大学に入る頃は、学園紛争という（これも若い方々にとって昔日の）別の嵐が吹いていた。私の大学の学部の恩師、小口武彦先生（当時東工大教授、現在長岡技術科学大教授）が、東大理学部物理学科におられた頃に遡ると、昭和21年、まだ戦争の色が濃く残っている時代である。小口先生は、茅研究室で、パーマロイ（ニッケルと鉄の合金）という磁性体の研究をされていた。茅先生はいち早く、嵯峨根遼吉先生（長岡半太郎先生の御令息）らと共に学術体制刷新のための計画を興されたり、文部省科学教育局長として我国の研究教育体制の再興に尽くされ、さらに戦後の経済の立て直しを目指した経済安定本部という機関のお仕事でご多忙乍らも、Becker und Döring：Ferromagnetismusという本のゼミは欠かさずに見て下さった由である。実験の指導は、近角聡信先生（その後物性研を経て現在慶応大教授）がされていた。時あたかも、東京帝国大学が東京大学と名が変わる頃である。このように、私などでもある意味では茅先生の孫弟子といってもおかしくはない、ということにこの文を草するにあたり初めて気づいて、人の流れの歴史の深さに、襟を正される思いがした。

茅先生については、多くのことが言い尽くされており、学内広報にも理学部によるオビチュアリーが載せられている。その巨人ぶりを詳しく紹介した、半澤朔一郎著「巨木 茅さん」という本も上梓されている。一つ、我々物理の学徒にとって馴染み深いのは、「茅コンファレンス」というユニークな研究会が毎夏（1963より）開かれていたことであろう。これは、丁度アメリカのゴードン・コンファレンスのように、インフォーマルな家族ぐるみで参加する会議で、堅苦しい会議録など出さないかわりに、老若男女まじえた非専門家が、専門家の講演に対し科学者の好奇心の赴くままに質問を遠慮なく浴びせるという、茅先生のイズムが遺憾なく発揮された会議で、茅先生ご自身も本年を除いては必ず出席されておられた由である。近年のテーマは、層状物質や高温超伝導等であった。

また、茅先生は敬虔なクリスチャンであられたが、親しいお弟子さんでもそのことを先生の晩年まで存じなかったり、葬儀のときに初めて知った方すらあるということで、先生の播かれた芥子種の結実の大きさを思うにつけ先生のお人柄を偲ばせるエピソードとして感銘深い。先生のご冥福を心からお祈りしたい。